

Contents *****

特集：「安倍ロス」後の日本政治を考える	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”Abe’s legacy” 「安倍晋三が残したもの」	7p
<From the Editor> オーラルヒストリー	8p

特集：「安倍ロス」後の日本政治を考える

衝撃的な安倍晋三元首相の銃撃事件から今日で2週間。参議院選挙（7/10）も終わり、今では「国葬」（9/27）の是非が話題となっています。死後も「国論を二分する」ところが、いかにも安倍さんらしいなと思われます。

ただし、「安倍ロス」後の永田町はいかにも視界不良です。自民党は参院選で勝利したものの、得票を分析するとその前途には不安がある。そして清和会（安倍派）の後継者も、簡単には決まりそうにない。このことは党内バランスを難しくするので、岸田首相も「これから誰と相談したらいいのか？」に迷うことでしょう。

そのことは、今後の経済政策にも影響するはず。アベノミクスの継承から次の日銀総裁人事まで、果たしてどんなことになるのでしょうか。

● 「安倍ロス」にしみじみ思うこと

前号の本誌は7月8日付けで、まさに「安倍元首相、銃撃さる」というニュースが飛び込んでくる中で書いていた。今週号を書こうとすると、あのと時の落ち着いたくない雰囲気も思い出してしまう。ニュースが気になって仕方がないのだが、それを見始めたら執筆作業が止まってしまう。どうにかいつも通り夕方までに書き終えたが、その後で「安倍氏死亡」の報が飛び込んできた。なんともやりきれない気分であった。

「安倍ロス」に対する海外メディアの反響は、意外なくらいに大きかった。例によって、本号では The Economist 誌のコラム（”Abe’s Legacy”）を紹介しているが、安倍氏の仕事は「豪州首相の視点」からよく見えていた、というのが発見である。”Japanese presence provides foreign-policy leverage in dealings with Beijing.”（日本はただ存在するだけで、対北京交渉の梃子になる）というケビン・ラッド元首相のコメントは「なるほど」であった。「アジアにおける日本」に対するフェアな評価と言えるだろう。

他方、気になったのは”Shinzo Abe assassinated.”という表現が飛び交っていたことである。あれって本当に暗殺だったのだろうか？ この点はどうにも異和感がある。

正直なところ、あれは「銃もどき」を使って行われた「事故」ではないのか。それもいくつもの偶然が重なった、極めつけの不幸な事故である。

颯感を買いそうな譬えで恐縮だが、まるで麻雀で役満を振り込んだ後のような感覚がある。いくらでも止める機会があったのに、なぜか当たり牌は止まらなかった。しかるに後悔先に立たず、局面は決定的な差がついてしまっている。点棒で大差がつくのはともかく、こんな事件の後には「運」に見放されてしまうものだ。当分、頭を下げて風向きが変わるのをじっと待つしかないのである。

犯人の奇妙な動機と異常な熱意については、ここで繰り返すまでもないだろう。その日の安倍氏は、本来は長野県に応援に入るはずであった。たまたま前日に長野の自民党候補者のスキャンダルが報道されたことで、予定が変更となった。そしてもうひとつの激戦区である京都府に向かうこととなり、その直前に隣の奈良県に立ち寄ったのである。奈良県の自民党候補は、十分に安全圏にいたはずなのだが。

応援演説は、大和西大寺駅という近鉄のターミナル駅前で行われた。「選挙の演説はいつもそこでやっているから」というだけの理由であり、警備はお粗末なものであった。ただしそれを言い出したら、この国における選挙遊説のほとんどは、およそセキュリティを無視して組まれている。この国の「安全神話」が、またひとつ打ち砕かれたということであろう。

かくして皆が魅入られたかのように、よってたかつて異常な犯行を成功させてしまった。「なぜこんなことになったのか？」という思いは、おそらく「安倍嫌い」の人たちにも共有されているのではないかと思う。

もうひとつ、変な連想をお許しいただきたい。それは「本能寺の変」である。たまたま織田信長は、わずかな供回りと共に京都に滞在していた。同じ時期に明智光秀は、丹波亀山から1万の軍勢を率いて、備中の対毛利戦線に向かうところであった。それが老ノ坂まで来たところで、「わが敵は本能寺にあり！」と叫んだと伝えられている。

これぞ日本史上最大のミステリーであるが、「本能寺の変」後の歴史は急転する。当たり前であろう。なにしろ奇跡みたいなことが起きてしまったのだから。それから先は、いくつものドラマが続く。中国大返し、三日天下、清須会議、賤ヶ岳の合戦、小牧・長久手の戦いなどである。誰が羽柴秀吉になって、誰が柴田勝家になるのか。意外な人物が浮上し、意外な人物が消えていくのはこういうときのドラマの常である。

同様に 2022年夏の日本政治も、様々な浮き沈みが待っているのではないだろうか。逆にこれで何事も変わらなかったとしたら、そっちの方がよほどの驚きだと思うのである。

●7/10 参院選結果を分析する

などと妄言を吐いたうえで、少し時間が空いてしまったが、7月10日に行われた参議院選挙の分析から始めたい。

選挙の結果は、自民党の圧勝であった。なにしろ改選過半数の 63 議席を獲得しているのだから文句のつけようがない。特に 1人区は 32 県のうち、落としたのが 4 県だけという圧勝ぶりであった。

ところがいつも通り、比例代表の得票数を確認してみると、また違う景色が浮かび上がってくる。投票率は前回に比して 3% 程度上昇しており、これは「安倍ロス」効果が働いているのであろうが、だからと言って自民党に風が吹いたようには見えない。むしろ 自民党の得票率は前回比で下がっている (35.4%→34.4%)。

反対に大幅増となっているのが維新の会である (9.8%→14.8%)。こちらは選挙区では苦戦が続いたものの、比例では 8 議席を得ている。「憲法改正」や「防衛費 GDP 比 2%」を公約していたこともあり、保守票の一部が自民党からシフトしたのではないかと推察される。

○参院選比例代表獲得数の推移

	2022年 参院選	%	2019年 参院選	%	2016年 参院選	%	2013年 参院選	%
自民党	18,258,791	34.40	17,712,373	35.40	20,114,788	35.90	18,460,335	34.07
公明党	6,181,431	11.70	6,536,336	13.10	7,572,960	13.50	7,568,082	13.97
立憲民主	6,769,885	12.80	7,917,720	15.80	11,751,015	21.00	7,134,215	13.17
国民民主	3,159,014	6.00	3,481,078	7.00	(↑ 民進党)		(↑ 民主党)	
共産党	3,618,342	6.80	4,483,411	9.00	6,016,194	10.70	5,154,055	9.51
社民党	1,258,623	2.40	1,046,011	2.10	1,536,238	2.70	1,255,235	2.32
維新の会	7,845,995	14.80	4,907,844	9.80	5,153,584	9.20	6,355,299	11.73
れいわ	2,319,159	4.40	2,280,252	4.60				
その他	3,615,762	6.80	1,707,167	3.40	2,795,269	6.90	2,547,229	4.70
合計	53,027,002	100	50,072,192	100	54,940,048	100	54,183,498	100.00
投票率	52.05%		48.80%		54.70%		52.61%	

左派勢力にとっては苦い選挙結果となった。立憲民主党は、比例代表における「野党第一党」の座を維新の会に奪われた。加えて国民民主党と併せても、1000 万票（もしくは 20%）に届かなかった。民主党が政権を担っていた頃には、得票率が 3 割を超えていたのだから隔世の感がある。ひとつは 野党勢力が「多弱化」しているからであろう。社民党は何とか踏みとどまって政党要件を確保したが、それは左派勢力全体にとって良かったのかどうか。

公明党と共産党という 2つの「組織政党」は、長期低落状態になっている。議員の高齢化が進み、コロナ下で「地上戦」の選挙活動が制限される中であっては、無理もない動きといえるだろう。そもそも時代が変わっている。地縁、血縁から同窓会など、さまざまな「ご縁」を総動員して、「××先生をお願いします！」という形の選挙運動は、もはや受け入れられなくなっているのではないだろうか。

逆に新興勢力のれいわ新選組や参政党は、ネット上における「空中戦」を得意としていて、驚くほどの得票を得ている。彼らの問題は地方組織という足腰がないことで、来年春の統一地方選挙における動向が要注目と言えよう。

これまでの与党には、「自民党が全体の 35%前後を獲得し、そこに公明党票の上積み」が 13%程度あるという勝利の方程式が存在した。しかし公明党の選挙術は壁にぶち当たりつつあり、自民党は「保守系の野党」に票を食われる恐れがある。

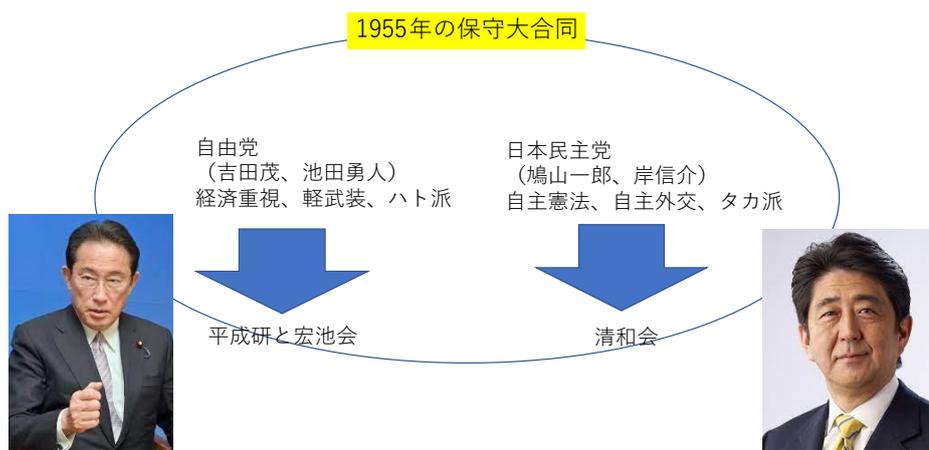
これまで自民党を支えてきた保守票の多くは、個人的な「安倍ファン」であった。彼らは皇室を重視し、中国や韓国を警戒し、拉致問題に憤慨し、伝統的な価値観を重視する。個々の問題に対しては非妥協的であるが、それが「安倍ちゃん」のやることである限りにおいて、多少の妥協でも大目に見てくれた。例えば、「プーチンとの平和交渉で領土問題で妥協することでも許してくれたのである。そんな保守層は、いつまで「安倍氏なき自民党」を支持してくれるのだろうか。

岸田首相にとって、当面の悩みの種は高市早苗自民党政調会長の人事となるだろう。茂木敏充幹事長と衝突を繰り返す彼女は、政権運営上の悩みの種であった。ところが今年の総裁選で、安倍元首相に推された高市氏には、相当数の保守票の支持がある。仮に彼女を更迭した場合はどうなるか。高市氏が離党して、より旗幟鮮明な保守政党を立ち上げた場合には、一気に票を食われてしまうかもしれない。

●楕円型・自民党の2つの焦点

かつて宏池会出身で首相を務めた大平正芳首相は、「楕円の理論」という言葉で自民党の強さを説明していた。

「楕円の理論」 (©大平正芳元首相)
組織は楕円形のように、2つの焦点を持っている方が安定する



国家や組織は、楕円形のように2つの焦点を持っている方が安定する。1955年に自由党(吉田茂、池田勇人)と民主党(鳩山一郎、岸信介、三木武吉)が、合流して誕生したのが自由民主党である。前者は「経済重視、軽武装、ハト派」、後者は「自主憲法、自主外交、タカ派」を理念としてきた。

両者がほどよく溶け合って、派閥間で抗争を繰り広げつつ、それでも政権を失いそうになるとちゃんと団結する。そうやって短い2度の下野期間を挟み、ほとんどの期間において政権を担ってきたのが今の自由民主党である。

70年近い歴史を経て、前者は平成研（茂木派）と宏池会（岸田派）となり、後者は清和会（安倍派）となって今日に引き継がれている。宏池会会長として大平正芳の後継者である岸田文雄首相は、このことを強く意識しているに違いない。しかるにもう一つの楯円の焦点である清和会は、安倍元首相の死後は後継者も定まらない状態だ。

これまでの岸田氏はときに安倍氏の機嫌を取り、あるときは敢えて意に逆らったりしながら、政策運営を行ってきた。

6月の防衛事務次官の人事では、安倍氏の意向に逆らうような交代を決めている。年末に向けて防衛3文書（国家安全保障戦略、防衛大綱、中期防）をまとめるにあたり、今後の安全保障政策を決めるのは私ですよ、と釘を刺した形である。安倍氏は不快感を示したようだが、その分はほかでサービスすればいいのである。

ほぼ同じ時期に決まった22年度の骨太方針では、「大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略」という懐かしい「3本の矢」のフレーズが復活している。これは内外に対して、「アベノミクス路線に変更はない」ことを示すためであった。こちらでは安倍氏に花を持たせた形である。

何しろ岸田氏にとって、安倍氏は後ろ盾であり、ライバルであり、相談相手であり、当選同期の友人でもあった。派閥の長としては、向こうが第1派閥でこちらが第4派閥。それだけに扱いにくくはあるけれども、とにかく安倍氏さえオクケーしてくれば、自民党内の「もうひとつの焦点」を抑え込むことができたのである。

ところが安倍氏は、派閥の後継者を定める前に凶弾に倒れてしまった。こうなると自民党は、片方の焦点を失った楯円形のようなものである。これから先、岸田氏はいったい誰に相談を持ち掛ければいいのか。そして、どうやって党内コンセンサスを醸成していけばいいのか。政界でもっとも「安倍ロス」を痛感しているのは、ほかならぬ岸田氏であるのかもしれない。

●安倍氏なきアベノミクスは可能か？

当面の清和会（安倍派）は、集団指導体制を取ることになっている。とはいえ、歴史を紐解いてみても、およそ偉大なリーダーが没した後の「集団指導体制」が、うまくいった試しなど聞いたことがない。次ページに派内の主な顔ぶれを掲載しておくが、「ポスト安倍」と言われるとなかなか厳しいものがある。

加えて現状の清和会は衆議院議員59人、参議院議員37人と数が多いので、いかにも分裂含みの危うさがある。あるいは清和会が派内をまとめるために、岸田執行部に対して敢えて無理難題を押し付けるようになることも考えられる。

<清和会の主な顔ぶれ>

*塩谷 立	72 歳	衆議院 10 回	派閥会長代行、元総務会長
*下村 博文	68 歳	衆議院 9 回	派閥会長代行、前政調会長
*松野 博一	59 歳	衆議院 8 回	官房長官
*高木 毅	66 歳	衆議院 8 回	国対委員長
*西村 康稔	59 歳	衆議院 7 回	派閥事務総長、前経済財政担当相
*萩生田光一	58 歳	衆議院 6 回	経済産業相
*福田 達夫	55 歳	衆議院 4 回	総務会長
*世耕 弘成	59 歳	参議院 5 回	参議院幹事長

気になるのは「安倍氏なき後のアベノミクスはどうか」である。

前述の通り、6月7日に閣議決定された骨太方針（経済財政運営と改革の基本方針 2022）では、懐かしき「3本の矢」のフレーズが蘇った。安倍氏の意を汲んだ党内の積極財政派が、「アベノミクス路線に変更はない」ことを強調するために盛り込んだものだ。わずか5か月間で為替が対ドルで20円も円安が進む中であって、「アベノミクスに変更なし」（金融緩和路線は変えない）という政府の意向を示した意味もある。

しかるにひとつ間違えば、「積極財政主義の清和会と均衡財政主義の宏池会」といった路線対立が生じかねない。中でも極めて気になるのは、来年4月に退任となる黒田東彦日銀総裁の後任人事である。世上、2人の日銀出身者（雨宮正佳副総裁および中曽宏元副総裁）に絞り込まれたとみられているが、これも党内政争の具にされてしまう恐れがある。

2008年の白川総裁誕生は、国会同意人事が迷走した挙句のサプライズ人事であった。2013年の黒田総裁は、「レジームチェンジ」などと呼ばれたものである。2023年の次の総裁人事は、できれば「ドラマのない」ものであってほしいところである。

○今後の主要政治日程

8月1日～	NPT 検討会議 （NY）←岸田首相出席
8月3～5日	臨時国会召集 →参議院正副議長を指名+安倍元総理追悼演説
8月15日	全国戦没者追悼式
8月27-28日	TICAD VII （チュニジア）
8月末	概算要求締め切り
9月上旬	内閣改造+党役員人事
9月11日	沖縄県知事選挙
9月21日～27日	国連総会一般討論 （NY）←岸田首相出席？
9月27日	安倍元総理国葬 （日本武道館）
9月29日	日中国交正常化50周年

<今週の”The Economist”誌から>

”Abe’s legacy”

「安倍晋三が残したもの」

Banyan

July 14th 2022

***”The Economist”誌のアジアコラム”Banyan”が、亡くなった安倍晋三元首相の功績を讃えています。東南アジアでの日本のプレゼンスは高く、それは安倍氏のお陰なのだ。**

<抄訳>

日本の首相は、国会会期中に外遊できない定めがある。国内にしか関心のない歴代の日本国首相たちに合わせたルールに見える。7月8日に暗殺された安倍晋三も、その軛から逃れられなかった。彼の81回に及ぶ外遊は、2012年から20年の2期目に集中している。

その結果、安倍氏は戦後日本でもっとも重要な政治家となった。安倍氏はかつて当欄に対して、中国の台頭は19世紀の「黒船来航」と同様な挑戦だと説明したものだ。そして国内では経済と防衛を強化し、普通なら対外的に引くはずの日本が、中国の自己主張を食い止めて、東アジアでは所与のものとされてきた開かれた国際秩序を守ろうとしたのである。

日本は同盟国である米国の地域への関与をさらに求める必要がある、と安倍は考えた。そのためのアイデア、「自由で開かれたインド太平洋」は今や米国のアジア戦略の中核を占めている。短命に終わった第1期安倍内閣でも、彼は日米豪印のクワッドを推進していた。

生煮えのアイデアではあったが、2期目の安倍氏はそれを復活させた。非同盟の伝統を持ち、中国と衝突したくないインドの説得は困難を極めた。当時のターンプル元豪首相いわく、あれは安倍がモディ首相を押しに押ししてようやく実現したのだよと。

安倍氏はまた、ドナルド・トランプの登場で変化した米国を認めた最初のアジア指導者だった。新大統領が従来の同盟国を腐し、TPPから脱退を決めた時も彼に接近した。そして残る11か国でCPTPPを形成した。「なんでも米国と一緒にする必要はない」とターンプル氏は言う。米国へのドアは開かれているが、アジア戦略は経済面に弱点がありと言えよう。

アジアにおける安倍外交は、国内ほど物議を醸していない。特に東南アジアでは、米中の地域覇権争いに巻き込まれることに消極的であり、日本は米国の最重要同盟国である。それでも日本は商業的関与が深く、インフラ投資への円借款は「一帯一路」よりも歓迎されている。日本の投資や技術移転には、中国のような政治的圧力がない。ラッド元豪首相によれば、「日本は存在するだけで対北京交渉への梃子になる」。今年3月、カンボジアのフンセン首相は岸田首相を盛大に歓迎したが、中国の沈黙は受けた衝撃の深さを物語っていた。

ひとつには、日本は滅多に他国に対して説教をしないので、米国には難色を示す独裁者たちも日本には痛痒を感じない。フィリピンの新大統領「ボンボン」マルコスも、前任者のドゥテルテのように反米が売りである。しかしこれもドゥテルテ同様に、日本に対しては防衛協力も含めて何の問題もない。そして今日の日本は、はるかに関与の深いパートナーである。これらはまさに、安倍氏がもたらした改革のお陰なのである。

<From the Editor> オーラルヒストリー

人間の記憶というものは不思議なものである。脳のどこかにそれを司る機能があるのだろうが、それは日々変化するらしい。昔はどうでもよかったようなことが、ある年代になって急に気になりだす。あるいは幼い頃の記憶が、突然に蘇ったりもする。その逆に、忘れてしまっていることも少なくないはずだ。おそらく人間の記憶というものは、何度も反芻されながら形を変えていくものなのであろう。

その昔、経済同友会に出向していた時代に、品川正治さんという上司にお仕えした。品川さんは副代表幹事・専務理事であり、日本火災の社長、会長を務めた方であった。その指示にはいつも迷いがなく、的確で、ブレがなかった。なおかつ、横道に逸れたときの雑談があまりにも深かったので、専務理事の部屋には来客が絶えなかった。しかも一度入った人はなかなか出てこられず、「品川さんの部屋は人を食う」などと言われたものである。

1995年に会社に戻ってから、年に1度、品川さんを囲む会に参加するようになった。昔の秘書たちが5~6人集まって、中華料理とともに品川さんのお話を拝聴する。これが毎年今と同じ時期（品川さんは7月生まれだった）に延々と続いたのである。

お年寄りの話だから、いつも同じことの繰り返しかと思ったら、さにあらず。品川さんの昔話は、80歳を超えた頃から明確に変わり始めた。陸軍兵士としての中国戦線での体験を語り始めて、その中には驚愕するようなエピソードが多く含まれていた。それまで抑圧されていた記憶が、公職を離れてからちょっとずつ解き放たれたのかもしれない。

「僕はねえ、その中国人の女スパイを、逃がしてやったんだよ。なんでそんなことをしたのか、わからんんだけどねえ」

「僕の足にはずっと不発弾が入っていたのだけど、この年になって溶けて流れ出たみたいだよ。その代わりに、黒い汗が流れておったなあ」

「中国の奥地に居ると内地からは手紙一本届かんのだが、この戦争は負けだというのはわかったねえ。1945年7月26日から、日本軍の軍票がまったく通用しなくなったから。後で調べたら、それはポツダム宣言公布の日だった」

どこまでが真実だったのか、いちいち深追いするような話ではないのである。こちらはジャーナリストでも学者でもないのだから、「ファクトの裏を取る」なんて真似をする必要もない。とにかく「極上の昔話」を聞いて、その迫力を浸っていればよかったのである。

そのうちに品川さんは、「護憲派の財界人」ということになって、反戦・平和運動の中で重きをなすようになった。しまいには日本共産党御用達の財界人みたいになったので、経済同友会時代の品川さんとはずいぶん違った人になってしまった。ただしどっちの品川さんがホンモノでどっちが偽物か、などという議論は不要であらう。そもそも人間はどんどん変わるものであって、筆者から見た品川さんは首尾一貫していたのである。

品川さんは2013年8月に亡くなられたが、ずっと定期的に昔話を聞いたことは、自分には幸運なことであった。「年寄りの昔話はいつも同じことの繰り返し」ではなくて、どんどん変化することを知ることができた。たぶん人間、70代と80代では自分の人生の対する評価も変わるし、そもそも過去の記憶自体が変化しているのではないかと思う。自分はまだその境地には程遠いけれども、この後、自分が加齢を重ねるにつれて、今と違う記憶を持つ別人になるのかもしれない、と考えるとちょっとだけ愉快的なことだと思う。

それで何を思うかという、早死にしてしまった人は気の毒だな、ということである。今月、67歳でこの世を去った安倍晋三さんは、ひょっとすると70代や80代になったらまったく違う人になっていたかもしれない。そして「こんなことがあってねえ…」と余人には窺い知れぬ物語を語ってくれたかもしれないのである。

それを考えると、つくづく奈良で起きた事件が悔やまれる。われわれはもはや、安倍さんのオーラルヒストリーを聞くことができない。例えばある日、安倍さんは突然に「今から思うとトランプさん（or プーチンさん）は酷い人でねえ・・・」みたいなことを語ってくれたかもしれないのである。が、その機会は永遠に失われてしまった。

人間の記憶は、もちろんそれがファクトであるとは限らない。とはいえ、ファクトなどつまらんものではないだろうか。生身の人間が、自分の人生をどんな風に覚えているのかが面白いのである。History とはイコール His Story のことなのだそう。人が死ねばその Story も失われてしまう。つくづく惜しいことだと思われてならない。

* 品川正治さん（1924-2013）の波乱万丈の生涯については、ご自身のメモワール『戦後歷程』（岩波書店）に詳しいのでご参考まで。ただしロングホープの紫煙とともに、ご本人の口からじかに昔話を聞いた者としては、「本当はね、この10倍くらい面白かったんですよ」と言いたくなってしまうところである。

* 次号は8月5日（金）にお届けします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com